

白山麓住民の環境観と展開—石川県石川郡河内村内尾—

広瀬 鎮 名古屋学院大学

MONOGRAPH ON EXPANSIONARY COGNITION TOWARDS ENVIRONMENT FEELING AMONG RESIDENTS IN HAKUSAN UTUO, KAWACHI-MURA, ISHIKAWA-GUN, ISHIKAWA PREFECTURE

Shizumu HIROSE, *Nagoyagakuin University*

はじめに—内尾村インフォーマントとの出会い—

石川県白山麓の村落における住民間に伝えられ、今日なお生活の中心ともなっている身のまわりの自然環境への対応から生じている地域住民間の自然観の形成実態や、自然認識の調査を通じて白山麓村落にて多くの自然への関心を抱く人びとに出会ってきた。もともと白山麓の環境内に生育し、人びとと深く係わっていた生きものたちの過去・現在について聞くことから出発した民俗調査であったが、本論では、集落の著しい変化ぶりに目を見張る思いの石川郡河内村内尾地区の住民からの生活体験談をもとに、個々のライフ・ヒストリーにおける地域での自然観を考察するものである。とくにインフォーマントたちの発話をとりあげて、白山麓各所で進む山村の現代化のなかにあって意識された「自然」とは一体何かをめぐり、認識人類学研究の視点から明らかにしたものである。

1975年にはじまった白山麓諸村におけるニホンザルと住民との係わりをめぐり聞きとりから18年が経過し、諸村落の近年の変化は著しいものがあるが、1955年末の高度成長経済と深く結びついた諸開発施策の展開や、流通革命を引き起こした道路網の整備拡大にもなう村々の近代化は、山村部の燃料を始めとする衣食住文化の変化として現われ、急速な環境の変化とともに地域づくり、村起しの努力にもかかわらず、近代化と共に引きおこされた過疎化と共に住民の減少、住民観の劣化、生活意欲の衰退と共に村々の存立が危機にさらされた。これ等の社会変化は、筆者をして調査着手後の民俗調査の視点を環境適応としての住民の生活文化関心へと向けさせてくれたのである。

各村落は、このような状況下のなかにあって行政機関をはじめ地区住民の努力は、死活をかけた村落の発展策を講じてきているのであり、内尾地区こそは、まさしく村落解体寸前に生きかえったともいえる地域である。本論では、地域づくりにいかに村行政が地域の開発に強く働きかけ、その具体的な成果をあげつつあるかという点や、観光や企業文化の展開と係わりながら進められた地域の文化開発そのものをめぐっては触れない。

だが、内尾地区に寄せられた観光開発、レジャーランド化、近代的ペンション群の成立、レクリエーション環境整備、社会体育への装置化等が、多様に進められているなかにあって、人為のすべては自然環境への働きかけであり、急速なる環境利用による地域開発であり、わずか5戸にまで減少した内尾地区住民の新しい時代にかける意気込みは著しいものがあるといえよう。特に永年にわたって内尾村落に暮らしつづけてきた人々は、如何なる文化観が今日まで存在しつづけてきているのか、以下に考察をすすめる。

しかしながら、本論では内尾地区の自然環境の特色や環境構造についての詳細には触れないが、雪

・なだれ・洪水等の自然災害に対する住民の生活上の工夫は、自然適応のそれであり、これ等は河内村史・民俗篇に一部収録されている。現集落から上流4kmの内尾川と桑原川の分岐点に古屋敷と呼ぶ地域があって、内尾集落から人びとは焼畑農耕のための耕作に出掛けていた。さらに、出作りによる生活以外には内尾地区の人びとは、金沢や関西地区へと働きに出て、集落を維持してきたが、1980年には12戸に減少していたのである。本論では、インフォーマントNA(81才)、MA(81才)2名の情報提供者の長期にわたる内尾地区で営まれたライフヒストリーにおける、ごく部分的な意識ではあるが、地区環境への認識の一端に触れることができたので以下にとりあげ考察する。

河内村の環境の自然史

石川県石川郡河内村は、白山に源を発する牛首川、尾添川の合した手取川の支流、直海谷川流域付近の13集落よりなるが、北は鶴来町、南は吉野谷村、東は白山国立公園奈良岳付近で金沢市に接して、西は手取川をはさんで鳥越村と接している(図1)。

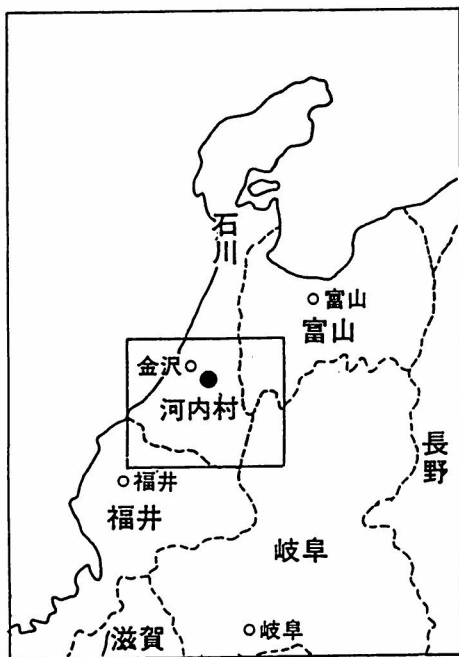


図1 石川県河内村の位置図

村の面積は7,459km²であり、1989年度学校経営計画書によれば、1987年12月セイモアスキー場の開設、1988年4月ふじが丘自治区の設立等、観光開発、地域開発の諸施策が推進され、雪に強い村づくりが実現されてきた地域社会の変革期にあつて、教育への投資を優先する村政の方針が意欲的に持続されている点も注目されよう(河内村役場 1989)。

筆者は、1972年村営内尾キャンプ場オープン以降の、自然環境利用の野外教育施設の運営に関心を有していたが、あわせて内尾地区の住民の自立と係わる営みの生活文化の推移についての文化伝承を、主として野生動物の消長を中心とする聞き取り資料を収集、収録してきた。地域環境問題は今や21世紀に向う人類が避けて通れない問題であり、地域文化のあり方も問われているとすら言えるのであるが(大来 1990)、1975年千丈温泉第一号泉の完成、1987・88年金沢セイモアスキー場営業開始、カナダセイモアスキー場と姉妹提携にいたる間、同地区居住の住民と自然との係わりについて、内尾地区民インフォーマントからの文化認識について収録をつづけてきた(広瀬 1976)。河内村は、村勢要覧(Village Information)

において「伝統文化を大切に、そして未来を招く」として、内尾地区の平家落人伝説、奥池に伝わる加賀藩士大槻伝蔵の隠し金山の伝説をとりあげながらも、スキー場に端を発した村域のリゾート開発を進めている現状が紹介されているが、その根底にある動態は、自然利用であり、住民にとっての生活文化は自然適応としての係わり合いなのである。

河内村全域の村民生活の、いわば人間形成の基本ともなるべき河内村教育行政は、地域社会における人びとの教育の基本方針について、1989年には、明るく充実した村民生活、連携と協調にもとづく故郷創造をあげ、教育期待の大きい点を指摘している。

河内村住民間の自然観や、自然認識の現実の姿を明らかにしようとする試みも、当然ながら、過去

から現代にいたる地域住民の生活と、生活の場としての環境が留意されなくてはならない。本論では、高齢化時代に生き、なおそれが一段と進むなかにあつて、河内村東端の内尾において地域の生活文化の創造性を指向しつつ、生きるための主体性を求めての日々の生活を維持しつづけている地域文化の継承者たちに焦点をあわせた。

筆者は、同地域インフォーマントからは、明治末より大正期にかけて、村制により内尾小学校が白山小学校の分教場であった頃の、小学校教育の様子について具体的に知ることができた(広瀬 1990)。今日同地区に住むインフォーマント達は、教育行政とも深く係わりながら生涯にわたる自己啓蒙をはかっていたことになるのであるが、人びとの成長と発達と共にあった村の変遷のなかにも、地域社会の自然環境との係わりの多様性が、ここに見い出せるのである。生涯学習体制下にある河内村において、インフォーマントたちが有する自然適応の知恵、生活文化の一端を明らかにしたいと考えている。

白山麓の市町村別カモシカ分布の変化を調査した水野昭憲氏(白山自然保護センター)は、1987年河内村内尾74.6km²内、カモシカの分布域を73.2km²として、面積に対するカモシカ分布面積比を98.1%、吉野谷村地区の98.3%とほぼ同じである。石川県下のカモシカ分布域は金沢市、鶴来町をはじめ10市町村であるが、1981年以降にカモシカの分布地域内での大規模な自然環境の変化としては、尾口村から白峰村にかけての手取川ダムの湛水、そして吉野谷村中宮温泉スキー場と、河内村のセイモアスキー場の建設をあげている。そして同氏は、それらのいずれの地区でも開発によってカモシカが消えたという話はなく、かえって人目につく機会の多くなったといわれている点を指摘している(水野 1989)。環境の変化と野生動物と住民の抱く意識の相関については、今後とも生物の存在を強く意識する住民意識と、生態分布の詳細な調査との結びついた自然環境の現状を問題としなければならない。また民俗学は、それぞれの時代の社会で生きのびた人びとの生活のスタイルの継承であり、ものの考え方を含めた生活の知恵(世相への対処法及び行動の選択等)の伝承を対象化するものであって、明らかに歴史の断面構造をも示しうるものなのである(小林 1984)。

内尾地域の生活民俗の近代化

1991年1月24日付河内村山岸善二氏(以下インフォーマントZ)からの一文をとりあげたい。筆者からの送付物「猿(法制大学出版局刊行)」が、インフォーマントZ宅へ到着した折り、ニホンザル(野生)が家の前にあるサクラの木に登り腰をおろして家を見ている姿を同氏の母親が発見した。河内村へのニホンザルの接近、サルの子息域の変化に関する情報は充分ではないのであるが、野生動物の人びとの居住区への接近は、近年しばしば人びとの話題となっていた。

書信には、“本物のサルが(大きな美しい1匹サル)家の前にあるサクラの木に登り腰を下ろして家を見ている姿を母が話しておりました”とあり、同氏は、このサルが当日の夕食時には家族の間でのにぎやかな茶の間の話題となったことを伝えてくれ、特別な関心のほどを寄せてくれた。この事は、近年の河内村地区での人びとの野生ニホンザルの村落接近をめぐる住民関心を物語るものといえるのではなかろうかと考えている。サルもカモシカも、にぎやかな話の種となるのであるが、なかでもサルは、ひとりザルではないかととりざたされたり、特にそれ等との出会いに何か因縁のようなものを感じさせることが多いのである(広瀬 1988)。

河内村住民間の自然観や、動物観もまた人びとの生活認識であつて地域の民俗生活の世界を構築しているのであるが、すでに内尾地区において、1977年8月29日、内藤長松氏(インフォーマントNA)、末井一松氏(インフォーマントMA)、坂田一雄氏(インフォーマントSA)、白座貞定氏(HA)(故人)等のインフォーマントから、「サルの目」「サル追い」(広瀬 1973、1989)等の口承に接しているの

あるが、野生ニホンザルと住民の出合をめぐる対応の心理については、現在とは、動物認識や、動物観に著しい相違がみられるのであり、今日では、怖れや嫌悪観がきわめて少ないといわざるを得ないのである。

1977年当時インフォーマント MA (末井) は、「大田善五郎さんのサルとり話」や、「1945年奥池地区でのサルの輪かけ (捕獲)」を語り、インフォーマント HA (白座) は、「ブナの高木の見張りサル」について述べ、サルは知恵がある動物だと思いと語っている。このように、内尾地区在住のインフォーマント達は、当時としても、なかなか人前に姿を現わすことはなかった野生ニホンザルに対しては、地域に固有に継承されていたサルの行動や、捕獲の話題のうちにも自然に生きるサルを「知恵のある生きもの」としての認識を強く抱いていたことが、十分に伺えるのである。先述の1991年1月のインフォーマント Z にみられたニホンザルへの思いのうちに、はからずも伝統的ともいえる野生動物への畏敬や、ある種の期待観そして自然指標性などの認識を伺い知ることができたものと考えらる。

1991年度、河内村教育委員会は、教育行政基本方針に、新しい時代にたくましく生きる青少年の育成と、明るく充実した村民生活、連帯と協調に基づくふるさとの創生を目標とし教育への期待、要請の強い点を取りあげ、各種の方針を明示している (河内村教育委員会 1991)。現代社会における教育課程に、科学技術の高度化、情報化、国際化、高齢化のなかでの人間性の確立が要請されるのであるが、地域の具体的な発展と共にある住民の意識の変化とも係わる人びとの主体性や、創造性、国際性については、多様な意識実態についてとりあげることから、それぞれに対応した教育の基本にふれることは、学校教育の場をのぞいては、なかなか困難なことであると考えらる。

1992年の河内村地域の聞き取り調査によって、内尾地区の人びとが、いかに地区の環境を強く認識し、自然に係わる生活のうちに求めを文化価値の実態について知見しえたので、本論では、インフォーマント NA、MA、Z、および山本重孝氏 (インフォーマント J) 4 名からの地域の社会変化のうちに見られた「自然環境への価値認識」を通じて、大正・昭和・平成期におよぶ内尾地区住民に現われた自然環境認識と自然観の姿について考察を行なっていく (図2)。すでに考察したが、河内村教育行政

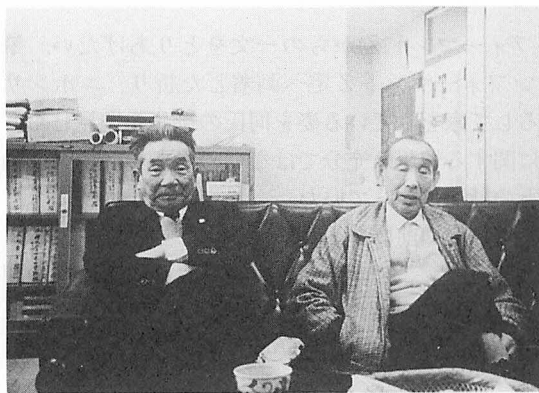


図2 昔を語る内藤長松氏 (左) と末井一松氏 (右)、共に内尾に現住

にみる、1. 自律的な人間、2. 創造的意欲に満ちた人間、3. 情緒豊かな人間、4. 実践力ある人間、5. 広い視野に立って郷土を愛する人間の5目標は、明らかに内尾地区住民が、戦後の地区開発と、山村の激変、過疎化、村落解体の危機、総合開発、観光化のなかにあった人びとの自らの形成・発展と無関係ではなかったものであり、とくに社会教育・家庭教育のそれぞれの機能と深く結びついてきて、今や生涯学習体制の確立となって生活学習の展開の場とも内尾地区がなってきた点を指摘したい。とくにスキー場の設営、温泉利用宿泊施設群の設置、各種レクリエーション文化

装置とそのため環境開発は、環境衛生、社会体育、生涯学習の場にくみ込まれ、新たな社会評価のうちにある存在となってきた (瀬田 1982)。本論では、河内村の風土に培われた自然愛護や、生活文化の継承と創造の文化活動のすべてに迫ることは出来ないが、18年にわたって山村文化の変遷を体験するインフォーマントたちを通じ、内在する自然知識、環境適応の知恵、新しい生活文化の創造過程

につき記録化の一步をすすめたのである。地域の文化継承と創造環境としての内尾地区は、地域(河内村)文化の創造の具体的な例として迫るのであるが、衆知の結集こそが、近代化と共に重視されねばならない。インフォーマントたちの諸々の自然観もまた都市化社会の進行、高学歴化、余暇の増大、低成長経済の浸透と係わった意識形成そのものであると考えている。

住民にみる自然知識と自然観

すでに環白山帯をめぐる文化総合開発構想は、観光事業施策のうちに見い出される。環境は、一大博物館であるとした「白山連峰合衆国」構想は進展しつつある。この構想は、石川県下に鶴来、河内、吉野谷、鳥越、尾口、白峰の6州の地帯に自然と歴史とに深く結びついた文化価値性を見い出したものであり、そこに暮らす人びとの生活文化と環境そのものの連携利用に焦点をあわせている。信仰・民俗・祭そして景観、冬期スポーツと温泉、史跡、民俗食、民芸・工芸・芸能・キャンプその他の野外レクリエーション、森林浴、各所、旧跡、歴史民族資料(図3)、および資料館、化石館、民俗村、自然環境、登山、ドライブ等々、これ



図3 内尾の大型くり猿
(民族資料としての保存が望まれる)

ほど多様な文化環境が価値ある所在としてとらえられた文化利用計画は、白山麓帯全体の環境をとらえることなしには成立しない。そしてこの種の観光開発プロジェクトは1980年代末から、全国各地で「ふるさと創設」の機運とともに高まりつつある(岐阜県美並村教育委員会 1992)。まさしく、環境博物館の出現といえよう(広瀬 1992)。なかでも河内地域は、豊かな自然のなかで人口増加率1位となり、自然を生かして暮らしの近代化をはかりつつある地帯として注目されてきた。このことは、白山麓帯における各村落に共通にみ

られる文化動態として特色づけられるが、白山麓における民俗学調査研究は、村落の形成時点から今日まで、継承されてきた生活文化の特質についての把握を急がねばならなくなってきた。と同時に文化保存から継承へ、調査は、現在に視点をむけざるをえなくなっているのである。

環境開発事業は、今や消費した環境の資源と人生の価値以上のものを社会に還元する義務を有するとする、美しい企業として機能せざるをえなくなってきた(ODS マネジメント研究会 1990)。内尾地区を例にとっても、住民の意識変革を迫った開発は、住民内在の伝統的文化観念と、いかなる結びつきとなって進められて行くことになるのか、民俗学研究の課題と今やならざるをえないのである。しかしながら、内尾地区の文化変容をめぐるには、住民自身が、今日に生きる生活文化を自らの認識としていかにとらえ評価しているかについては、人びと自身もまた十分な記録化や、資料化がなされにくい状況ではなかろうか、筆者の河内村内尾地区への民俗学研究上の関心を抱いてからの調査活動を支えてくれているのは上山秀之氏の「河内村史下」である。1991年調査の折り、同氏より示された多種におよぶ自然環境情報資料は、現在では、貴重な価値を有するものである(図4)。内尾地区の現代化の過程での住民生活文化の変化については住民自身の手によってはいまだ十分な記録化がなされていないのであるが、幸いインフォーマント NA、MA 他の努力によって記録化の方向がみられている。

筆者は、内尾に暮らした一戸一戸の家族集団毎に継承されてきた生活習俗を生活誌としてとらえ、

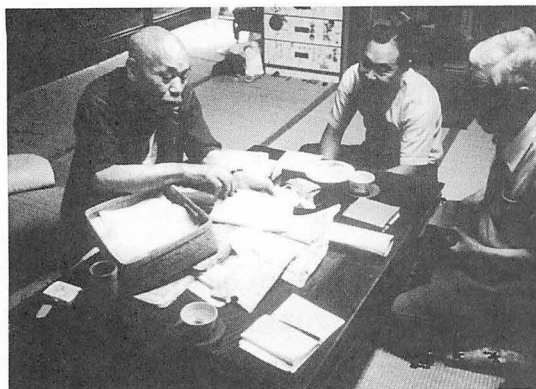


図4 上山秀之氏(左)と語る山岸善一氏(中央)、山本重孝氏(右)(上山氏宅にて)

内在する自然認識からみた自然民俗の姿を明らかにしたいと考えている(鈴木 1990)。

手取川扇状地の要位置にある河内村は、手取川第3ダム湖水を有し、直海谷川が村域を横断する。冬期の降雪地であり、標高1,601mの奥三方を最高地とする地勢環境を利用し、13の集落が特色ある自然と係わる生活文化の形成を推進するなかで、手取川沿い地域の水稻栽培に対し、直海谷川沿いは、林業と砕石業が盛んであるが、1991年次の調査聞き取りにおいても、山菜利用の山菜加工センター、ワサビ、エノキダケの特産品化をめぐる住民の自然物への関心が明らかとなった。コツラ(マタタビ)細工工芸品振興に深い関心をも

ちつつけている幅口太吉氏(河内村字吉岡)、田中博氏(河内村字福岡)、岡本清善氏(河内村字ふじが丘)にみられた自然物利用と価値認識、資源活用をめぐるそれぞれの情報提供者の自然認識の諸相について知ることができたのである(図5)。なかでも岡本清善氏は、コツラ細工に終日家族の者と作品製作に励んでいるが、強い関心は、地域をとりまく周辺地域の民芸品生産事情、技術デザイン情報の収集であり、地域外文化接触の必要を強く主張している点に注目したいのである。地場産業を指向するコツラ細工工芸に係わる地域高齢者の強い意識は、地域外文化との交流であった。

また、1992年聞き取りにおいて、生活と自然の存在が意識され、自然が究極の財である点が河内村内インフォーマントであるNA、MA、Zが指摘しているのであって、これらは明らかに自然知識の上になつた自然観の現われであるにとらえるものである。地域の手作り生産物が、民芸・工芸の方向へ導き出される事例は、白峰村地区における牛首紬の例があげられるが、必ずしも過去の伝統物産が、復活し脚光をあびたものとは限らない。今日聴取した内尾紙についてはインフォーマントNA、MAの記憶に残る材料としてのコウゾ自体の性状(品質)が、地域内の地形・環境差による所が大きい点が、指摘された。粘着材としてのネリの樹も同様環境の影響を強く受けている点を明らかにしてくれた。内尾紙(和紙)の品質の背景となる自然環境要素が、強くインフォーマント達の心をとらえていることが判明した。今日大学研究機関の民俗調査がこの内尾紙にむけられていると聞く。すでに、内尾地区の製紙用具(紙漉)一式は、石川県立歴史博物館に収蔵され、展示公開もなされている。だが、これ等にたずさわった人びとの心の働らきや、ここでとりあげる自然観や環境認識等は、紹介が充分にはされたとは言い難いのである。

かつての内尾特産ともいべき内尾紙は、市原紙にくらべ品質においてすぐれ、白色、薄手で堤灯、唐傘への利用が高く評価されたのも、よくきく「ネリ」とさらし技術によるとインフォーマント達は語る。そのネリとなる樹木は千丈のてっぺんのものが最も良く効き、内尾地区の先代たちが特に留意して植栽しつづけたものであり、原料であるコウゾそのものについての諸特質が確実にとらえられていた。良質のコウゾの樹皮が赤味をおび、薄い点などの指摘が、つぎつぎとなされた。内尾地区の産業については、「河内村史上下」に詳しいが、内尾地区に関しては木炭生産の推移などもとりあげられている。内尾紙は、1960年を最後として消えて行ったと記述されているのであるが、内尾地区の諸産業は、その多くが1960年に前後し、戦後の経済変化、エネルギー革命、石油生産物の進出、農耕作の機械化、高度経済成長、道路網交通の発達、過疎化にともなって、ほとんどが消滅していったのであるが、それまでの間、年間を通じ、自然の暦に合致した生産スケジュールが確立されていたことが、

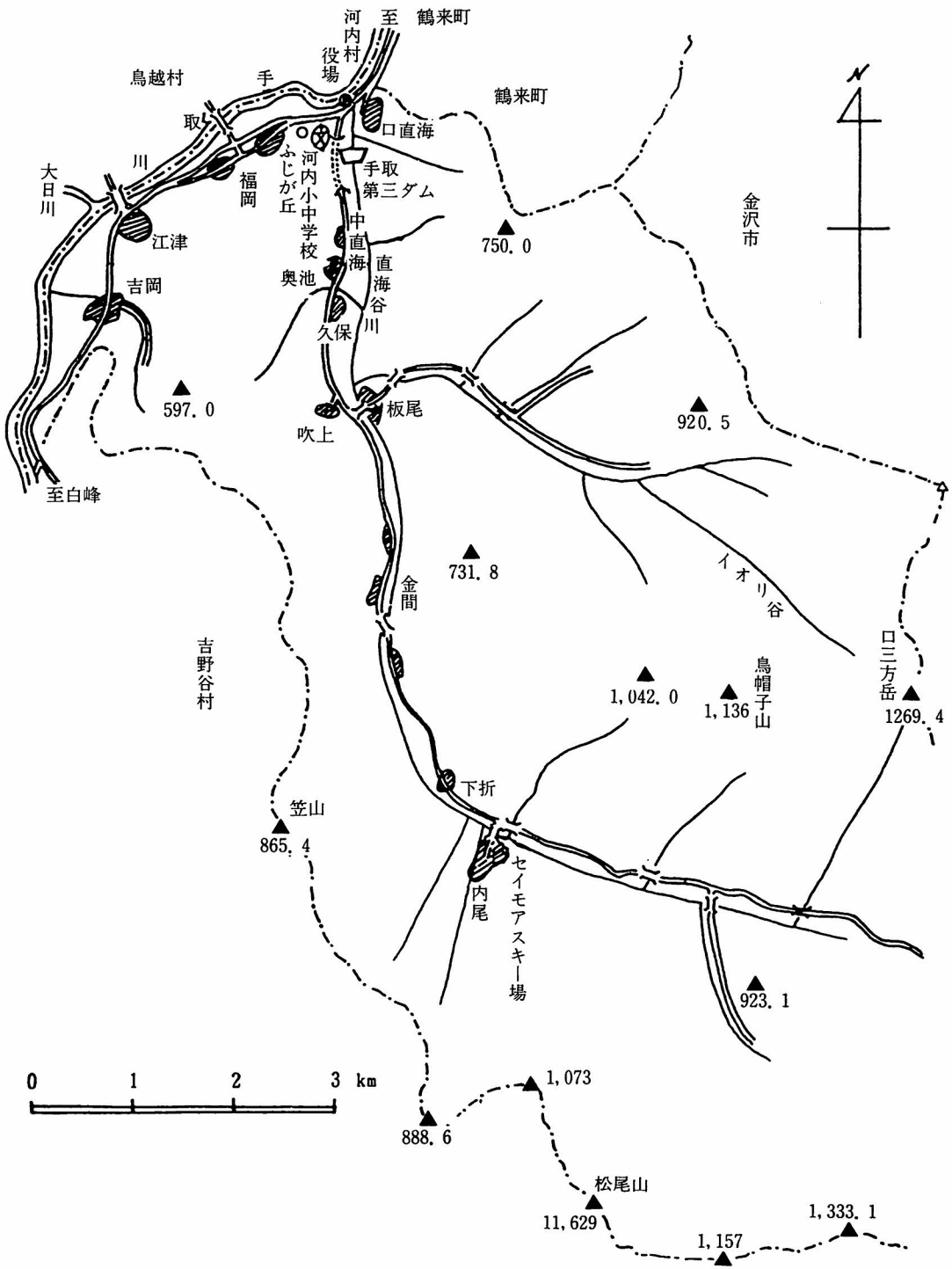


図5 河内村村落環境名

インフォーマント達の発話で明らかとなった。

紙漉は、内尾の人びとの生活をどこまで豊かにしえたのかは不明であるが、物産やその技法、習俗は、内尾地区に息づいた生き方の形式としてすぐれた文化であったが、今日では、それを耳にすることがない (木村 1988)。インフォーマント達によれば、養蚕に係わる用具等は戦時中の桑畑の芋畑への変更や、その後の科学繊維の進出等が1949年以後の養蚕の消滅となったと理解され、不用品となった養蚕用具等はすてられ、蔵のつくりかえを期に、姿を消したと伝統産業の解体とそれへの対応した行動を記憶していたのである。内尾地区の産業の消滅過程が語られ、これ等を支えた実労働態と、諸認識が平行して明らかとなった中で、尾口村、吉野谷村地区における調査同様に、煙草栽培における害虫駆除の労作業が話題となった。筆者は、白山麓帯の自然環境において共通してみられた自然対応のうち、害虫、鳥獣害については継続して注目しているのであるが、虫害をめぐる民俗の収録は、虫送り習俗をのぞいては十分な調査がなされていないのである (岡本 1992)。煙草栽培時における毎朝の虫の駆除をとりあげても、内尾地区にみられた地産産業、伝統産業をめぐる「苦労の民俗」は、自然対応の歴史として、今後過去からの記憶が収録されるべきであると考えている (梅谷 1986)。

生きものをめぐる自然民俗

1977年の聞き取り調査では、野生動物と住民の係わり、自然への働きかけ等をめぐる生活伝承や習俗について、その実態を明らかにすべく、生活様式の確認とともに生活文化についての意識変化の追跡を行ったのであるが、今回は、インフォーマントの食文化をめぐる意識や、自然環境そのもの、また環境変化と、自然物認識についての知見をえたので次に考察する。聞き取りは河内役場にておこなわれ、インフォーマント NA、MA、Z、J の参加をえた。これら情報提供者の記憶や記録は、いうまでもなく貴重な資料であり、この事は以下の文化交流談合においても明らかであった。すなわち1991年夏に試みられた愛知県南設楽郡鳳来町下吉田、ふるさと学文化学研グループとの交流会における論議の中心となった「山村の消滅と文化継承」(広瀬 1991) は、インフォーマント達にとっても、住民、高齢者による地域の民俗文化の記録化の重要性が強く認識されたのである (図6)。

1992年調査においてインフォーマント達は、衣・食・住・生業、自然環境等多岐にわたる文化事象について、過去から今日に及ぶ生活情報や文化意識についての提供があった。とくに地域に継承される味覚の世界にクサダンゴ、味噌が話題となったのであるが、今後これらは「味覚の文化継承」として別稿でとりあげる。とくに重視されるのは、例えば、クサダンゴに使用される材料としてのモチグサをとりあげても、生育地による相違、製法、味覚風味の地域差、さらに、現在の味覚の一般評価等詳細にわたって、インフォーマントの食文化情報に接したのである。観光受容体ともなった内尾地区における食文化は、当然ながら、特色ある土地柄、自然味を提供しながらも都市文化の受容も要求されるのである。セイモアリゾートの充実はこれ等に深く係わる。食文化変容に関しては、引きつづき調査を行なうものである。

インフォーマントの指摘した環境変化の認識を、オロとよばれる昆虫生態から考察する。



図6 山村の消滅を語るふるさと文化学研グループとの交流会 右より、山本重孝氏、内藤長松氏、末井一松氏 (内尾道場にて)

自然環境への人為がもたらせたのは生物層の減少であるが、インフォーマント達は、かつて住民そのものも悩ませつづけてきたオロの急速な減少をあげたのである。内尾は、ウルリ（ウロ）と呼ばれるアブがいて、夏はオロ、秋はヘクサンボ（カメムシ）が、嫌われものの代表であった。

インフォーマント NA によれば、オロはオロロとも言い、吉野谷村居住のインフォーマント J はオロと呼んでいる。またヘクサンボはヘコタともよばれているが、石川県農業短期大学、富樫一次教授によれば、ヘクサンボはクサギカメムシと同定されている。内尾でもアブの仲間のウルリの吸血性はよく知られていた。上山秀之氏によれば、直海谷では、水の美しい奥地の方へ行くほど多いとされ、白山麓では山間部ほど多かった。オロは、7月下旬から8月中に出現し、暑夏の40日ほどの間多い所では蜜蜂のようにむらがってとんだ。またオロは身体に止まるとみれば、素早く血を吸う昆虫でいやがられてきた。オロが、ススキの根茎に産卵し、新芽が出ようとする芽の中に寄生し、一つの芽の中に30匹ぐらいの幼虫が生育して羽化すると言われてきた。

オロはイヨシロオビアブのことであり、オロロとも呼ばれるが、和名シロアブもオロと呼ばれてきた。筆者は白山麓にいるアブの標本を河内村役場において見る機会をえたが、吸血時の痛みの体験が筆者にもよみがえってきたものである。

インフォーマント Z より寄せられた富樫教授からのデータによれば、このイヨシロオビアブの産卵場所は不明であり、若令幼虫の生息場所が全く不明とのことである。調査は今日なお充分になされていないのである。それにもかかわらずにオロはその姿を内尾地区からは消しつつあるのが現状なのである。

ヘクサンボ（クサギカメムシ）に対するインフォーマント達の嫌悪意識も強いものであるが、痛覚と匂覚体験の違いもあってかオロに寄せる嫌悪とはくらべものにならない。インフォーマント MA はヘクサンボのオスメスの体型の違いを指摘していた。ヘクサンボについての記憶情報は、格別に多いものではなかった。ところがオロに関する情報は多く、オロの生息域の変化や、直海谷砕石場所には姿がみられなくなっている事実、これまでオロは高所におらず、水のきれいときれた川辺にみられたものが、今日では、ほとんど見られなくなった等多くの情報に接した。インフォーマント達にとっても悪しき思い出は、なかなか消え去らないのである。昨今では、一匹でも出ると大きわざととなるとインフォーマント達が語っている。

注目したいのは、インフォーマント NA は、オロの生息場所は、河原の石で、がたがたした場所であるとしている点である。富樫教授はイヨシロオビアブの老熟幼虫は、朽木、倒木や岩上の蘚苔類の下にみられるが、腐葉土層からは見出されていないとしている。このようなオロの生態をめぐる情報も、急速なオロの減少下にあって、その実証もあやふやになってしまったのである。直海谷川はインフォーマント NA の少年期においても、ウナギの生息をみている川であったが、川の流域からオロがみられなくなった現在、ゴリをはじめとする川に住む生物の減少については、すでに1955年以後のこととして筆者は環境情報に接してきている。また内尾地区周辺の山野における鳥・獣の減少の証言者ともなりうる存在に、インフォーマント達は現在なりつつあるのである。

インフォーマント達は、“ころっとおらんくなった”としばしば告げる。内尾には昔のようにスズメが大群をなしてくらししていない。マムシやウサギ、これ等の減少は、多様な環境と人との係わりのなかで生じたものであるにせよ、自然物の自然史が完全にまで掌握されないうちに、自然変化は特定の環境に迫っているのである。

先述した内尾地区のインフォーマント達と南設楽地区の高齢者間の情報交換で、もっともショックを受けたのは、周辺の山村の消滅を体験したふるさと文化学研の人びとであった。

内尾地区のインフォーマント達は、従来とは、およそ異なった自然、社会の両環境のうちにあつて、

ここにおいて、環境へ働きかけた過去の歴史と、水や空気そして森林や大地という自然と係わった民俗への科学的な追求が、重要な課題として、また文化変化として迫ってきたことは明らかであろう

延宝4年(1670年)、内尾は、28戸の住民が暮らしていた(内藤家伝 山割帳)。今日では、時として当時をはるかにこえる人びとが内尾にやってくる。内尾の自然を体験する地域外の人びとにとっての内尾の環境に対して、地域住民による自然民俗学研究的関心は、必ずや、あらたな提案をなすことになるものと考えている。それは、環境にやさしい人間の育成そのものであるに違いない。

おわりに—民俗としての地域の環境観—

今日、地域社会の生活文化の解明に当っては、自然観や、住民の信仰観への深いほりさげがきわめて重要となってきた。今回の報告論文では、内尾地区における墓制については触れることがなかったが、インフォーマント NA、MA の両者自身も多くの疑問点をあげている。地形そして土地利用とも係わりながら、宗教は生活の中に深く係わっているのであるが、同時に自然に対するさまざまな思いも又、民間信仰や、精神文化活動として多様にひろがっている。次報告においては、このような地区の精神文化の継承について考察が進められることを期待している。これは、自然観や自然知識の解明に当って不可避なものなのである。自然を形成する空圏、水圏、地圏のすべてに係わる住民の生活空間での行動の様式は、当然のことではあるが、住民自身の自己発見と係わらねばならないのである。内尾地区には自然祭りというべき春・秋の祭りが継承されており、住民もあらたに出現をみた平家まつりと係わっての展開も期待している。

幸いインフォーマント NA 他において、戦前・戦後を通じての村落の変遷が記憶され、記録化がすすめられている。戦後、電灯が始めて内尾につき、ラジオが聞けるようになった生活変化を、インフォーマント達は強い印象をもってうけとめている。その後の急速な地区の文化変容が、いかに住民に影響を与えたのかは、インフォーマント達によって明らかとされる日も近いと考えている。インフォーマント達の主張する「内尾性」の他村落との違いが明らかとされる時、地域固有の文化の特性が一層話題となるに違いない。筆者は内尾地区住民に内在し、形成されてきた環境観のさらに新たな展開を今後とも学びたいと思う。自然をよく知り、自然の価値を先見したインフォーマント達の文化意識が、そこに存在している限り、地域の自然に対する住民の自然対応の民俗が、えがきつづけられるものと考えている。

すぐれた自然が知覚され、その学術的価値が明らかとされ、万人のレクリエーションとして公開され、恒常的に利用、接することもできる環境は、優れた自然史博物館であり、環境博物館である。そのような意味から、内尾もまたエコ・ミュージアム(環境博物館)としての存立が強く望まれているものと考えている。

本論は、石川県白山自然保護センター、自然保護調査研究費を受け、調査が試みられたものであるが、多くの方々の御指導と協力を得た。河内村教育委員会をはじめ、地元文化振興にたずさわる幅口太吉氏、田中博氏、岡本清善氏、また内尾地区からは、内藤長松氏、末井一松氏、そして河内村教育長山岸善二氏、上山秀之氏、下吉野山本重孝氏、そして調査に当たって種々御配慮賜わった岩田憲二氏に深甚の謝意を述べさせて頂きたい。

文 献

岐阜県郡上郡美並村資料委員会(1992) 山と川に生きた生活再現手作りの資料館。美並村教育委員会、牧野出版。

- 広瀬 鎮 (1973) 猿. 法政大学出版会.
- (1976) 石川県石川郡河内村内尾にみられたニホンザル伝承と白山山麓地域における住民の自然認識と民間伝承比較論の成立. 石川県白山自然保護センター研究報告第3集, 石川県白山自然保護センター.
- (1987) 山村社会における猿の民俗 (2) 環白山帯にみられる気象予知の俚諺に係わる動物伝承と地域住民の自然観. 名古屋学院大学論集第23巻第4号.
- (1988) 中部山村社会における猿の民俗 (4) 白山麓鳥越村近代化にともなう住民の自然観の変化. 名古屋学院大学産業科学研究所研究年報1, 名古屋学院大学産業科学研究所.
- (1989) 猿と日本人. 第一書房.
- (1990) 中部山村社会における猿の民俗 (5) 石川県石川郡吉野谷村吉野地区にみられる住民の環境認識と動物. 名古屋学院大学産業科学研究所研究年報3, 名古屋学院大学産業科学研究所.
- (1991) 山村の消滅をめぐる民俗学—村落の存続と消滅めぐって. 山村の民俗, ふるさと文化研究グループ.
- 広瀬 鎮・山本重孝 (1991) 環白山麓帯にみられるニホンザルにかかわる地名の伝承—境とサル民俗への接近—. 石川県白山自然保護センター研究報告第18集, 石川県白山自然保護センター.
- 糸魚川淳二 (1986) 日本の自然博物館. 東京大学出版会.
- 河内村教育委員会 (1988) 学校経営計画. 河内村.
- 河内村史編纂委員会 (1981) 河内村史上巻. 河内村役場.
- 河内村役場 (1991) 河内村村勢要覧. 河内村
- 木村尚三郎 (1988) 「耕す文化」の時代. ダイアモンド社.
- 小林忠雄 (1984) 伝統都市の民俗社会構造. 現代の人類学1, 至文堂.
- ODS マネジメント研究会 (1990) 美しい企業とは何か. PHP 研究所.
- 岡部 守 (1986) 水の文化誌, 論創社
- 岡本大二郎 (1992) 出獣除けの原風景. 日本植物防疫協会.
- 大来佐武郎 (1990) 地域環境と経済. 中央法規.
- 佐々木長生 (1990) 民具の保有状況から見た生活誌. 文化研究所論集「歴史と民俗6」, 平凡社.
- 瀬沼克彰 (1982) 企業の文化戦略. 学文社.
- 上山秀之 (1983) 河内村史下巻 (民俗編). 河内村役場.
- 梅谷献二 (1986) 虫の民俗誌. 築地書房.
- 吉岡郁夫 (1990) 民俗学と自然科学. 学生社.

Summary

Hearing informant's cognitions for vanishing insects and decreasing numbers of animal and fish, author found their feelings to natures and environment at the Nomidani river and now author tried to compare the change of animal lore informations during 1977 - 1992.

The informants mentioned accumulated knowledges for nature as adaptive way of life the author could analyze and found deep mind of coexistence with increasing cultural developments in Utsuo new zone.

Pursuing informants' behavior and cognition towards nature of Utsuo. author did evaluate their own attitudes to environment.

It is so valuable to disclose the informants to minds that author always extend their suggestions. Kawachimura town now is advancing and promote new life style of culture in Utsuo.

Residents' knowledges and minds to nature are now promoting folkproducts and cultural

events for visitors from city. author could report acculturize phenominon in Utsuo through informants' activities.